

【シンポジウム】

ケベックにおけるフランス語教育
 ——社会文化的コンテクストのなかで——
 L'enseignement de la langue française au Québec :
 les enjeux dans son contexte socioculturel

趣旨と概要 Introduction

コーディネーター：西川葉澄
NISHIKAWA Hasumi

フランス語がケベックのアイデンティティを支える一つの大きな要素であり、ケベックの歴史はケベック州におけるフランス語の地位や重要性をめぐって織りなされてきたと言っても過言ではないだろう。本シンポジウムでは、ケベックにおけるフランス語教育を包括的な主題として全国大会のシンポジウムのテーマに初めて取り上げ、フランス語教育がケベックの独特な社会文化的コンテクストにおいてどのような状況にあり、どのように展開されているかについて検討する試みがなされた。3件の報告がなされたが、ケベックにおけるフランス語教育という共通のテーマをめぐらるものでありながらも、各報告者の研究領域はそれぞれに異なるものだった。それは、第二言語・外国語としてのフランス語の教科書の語彙分析、大学の外国人留学生支援としてのフランス語教育、英語学校におけるフレンチ・イマージョン教育に及び、ケベックにおけるフランス語教育の様々な広がりや局面をすでに暗示するものだったとも言えるだろう。これらの多様な研究報告により、本シンポジウムが多角的な視座を持つ意義深いものとなった。また、日本フランス語教育学会の会長でもある京都大学の西山教行氏をコメンテーターに迎え、各報告へのコメント及び質問をいただいた。時間的制約から討論形式とすることができなかったが、各報告後の西山氏からのコメント及び質疑に対し、それぞれのパネリストが応答のコメントをすることで対話とする形式となった。また、ハイフレックス形式で行われた大会の特性を活かし、会場からは2名のパネリストとコメンテーターおよび司会者が参加し、1名のパ

ネリストはオンラインからの報告という構成になった。

まず、近藤野里会員（青山学院大学）から「ケベック州で出版されたフランス語教科書に見られるケベック・フランス語の語彙について」と題した報告があった。ケベックで一般的に使用されるフランス語には、ケベック特有の語彙や表現が存在する。その内訳はアルカイズム、アングリシズム、ケベックの文化や社会の特殊性を反映する語彙など様々であるが、そのような語彙・表現がケベック州で出版された第二言語・外国語としてのフランス語習得用の教科書においてどのように扱われているか、詳細な分析によって明らかにされた。報告者は標準ケベック・フランス語の語彙と、辞書において「非標準的 (non standard/famlier)」と定義される語彙の提示方法に着目し、非標準的とされる語彙には教科書において社会文化的知識を補う付加情報がどのように与えられるかが示された。コメンテーターの西山氏からは、アングリシズムが言語接触の結果である言語現象としてケベックの住民たちに承認されているのか、および標準的なケベック・フランス語と社会階層の関係について質問がなされた。

次に、松川雄哉会員（早稲田大学）から「移民の社会統合を支えるフランス語教育：ケベック州の大学における取り組みについて」と題した報告が続いた。ケベックにおいて非フランス語話者の移民の社会統合を促すためには、フランス語教育の重要性が指摘されているが、ケベックの新来移民たちはケベック人とフランス語でコミュニケーションすることに困難を感じており、ケベック人と質の高い交流を図る機会を持てることがフランス語運用能力の向上及び、社会統合への重要な課題となっているという。ケベック州の大学においては非フランス語話者の留学生を対象に、彼らのフランス語学習や社会統合を促進する目的及び、教員養成等の一環としてさまざまな試みを行なっているという。UQAM（ケベック大学モンレアル校）での *Jumelage interculturel*、ラヴァル大学の *Rêver en français* での活動が紹介された。コメンテーターの西山氏からは、留学生のフランス語教育支援活動に実際に関わる学生やシステムについて、および参加者のニーズについての質問がなされた。

最後に、小松祐子会員（お茶の水女子大学）からは「ケベック州におけるイマージョン教育の現状と課題」と題した報告がなされた。カナダにおけるイマージョン教育プログラムとは、英語学校の生徒を対象にフランス語により数学、科学、歴史、地理などの授業が実施されるいわゆる「フレンチ・イマージョン」であり、大量のインプットによる自然なフランス語習得による英語

とフランス語のバイリンガル養成がその目的である。イマージョン教育には一定の成果が認められており、アングロフォン家庭のニーズを受けてケベック州以外にもカナダ全土に広がりつつあるが、課題としては教員不足などがあげられる。また、2022年6月に発効されたケベックのフランス語化の強化を狙う96号法により、英語系Cégepにおいてフランス語で3科目履習することが義務となるなど、増加するアロフォン学生から今後の反発も懸念されるという。ケベック州のフランス語の重要性と特殊性を考えさせられる示唆に富む発表であった。コメンテーターの西山氏からは、カナダにおけるバイリンガル話者の増加が示す内訳には、新来移民が貢献しているのではないかという質問がなされた。

世界第二のフランス語圏でありながら、北米大陸という地理的要因により英語話者の地域に囲まれ、大海の中の孤島とも喩えられるケベック州の特殊なフランス語教育事情の一端を社会文化的コンテキストにおいて位置付ける3つの角度から立体的に考える機会となったと言える。そしてそれぞれの報告が西山氏の的確なコメントと質問を端緒とする対話により、一層深みが出たものとなった。現代のケベック社会のあり方をフランス語教育の面から俯瞰するような意義深いシンポジウムであった。

(にしかわ はすみ 慶應義塾大学)

【シンポジウム】

ケベックにおけるフランス語教育
——社会文化的コンテクストのなかで——
L'enseignement de la langue française au Québec :
les enjeux dans son contexte socioculturel

ケベック州で出版されたフランス語教科書に
見られるケベック・フランス語の語彙について
Le lexique du français québécois dans les manuels de
FLE publiés au Québec

近藤野里
KONDO Nori

ケベック州で話されるフランス語は、ヨーロッパのフランス語とは異なる特徴を持つ。特に語彙については、アルカイズムやアングリシズム、そしてケベックの文化や社会の特殊性を反映する語彙を有するなど様々な特徴が挙げられる。ケベック・フランス語の規範についてはこれまで様々な議論がなされてきたが、国際的なフランス語と同様の規範を持つが、語彙および発音レベルでは独自の規範を持つことが指摘されている (Bigot, 2021)。特に語彙については、1980年代以降のフランス語審議会やケベック・フランス語局による数々の研究、辞書の作成によってケベック独自の規範が形成されてきた。そのため、イマージョン教育や移民のためのフランス語教育で使用されるフランス語教科書では、ケベック・フランス語に特有な語彙や表現も扱われる。ただし、過去に出版された教科書に関しては、ケベック・フランス語の標準的な語彙が提示されるものの、非標準的な語彙の提示が不十分であるという批判もある (Auger, 2002)。また、ケベック州やカナダ以外でのフランス語教育においてもフランス語圏の様々な国・地域の文化・言語に関する情報とともに、ケベックの文化やケベック・フランス語の例が扱われることが増えている。しかし、実際には非標準的な語彙・表現ばかりが紹介されることで、ケベック・フランス語があたかも非標準的な語彙・表現しか持たないという

ような誤解を学習者に与えてしまうという問題が Chaliere (2021) によって指摘されている。

最近ではケベック州の言語・文化的状況を十分に反映した第二言語習得用のフランス語教科書が出版されるようになってきており、教科書作成者がケベック・フランス語の話し言葉の特徴を反映するために様々な工夫を凝らしていることも指摘されている(近藤、2019)。本研究は、ケベック州で出版された第二言語・外国語としてフランス語を学ぶためのフランス語教科書の中で、ケベック・フランス語に特有な語彙がどのように扱われているかについて明らかにした。本研究は2017年以降にMD社から出版された教科書シリーズ *Par ici méthode de français* (A1, A2, B1) をコーパスとして分析に使用した。分析において着目したのは、ケベック・フランス語の標準的語彙および非標準的語彙の提示方法である。研究方法として、教科書コーパスからケベック・フランス語に特有な語彙106個を抽出し、オンライン辞書 Usito で語彙の意味・用法を確認し、標準的なものと非標準的なもの(口語的な語彙およびアングリシズム)に分類した。106個の語彙のうち標準的な語彙は68個、口語的な語彙は24個、アングリシズムは14個であった。また、教科書の中で語彙に情報が付加される場合と付加されない場合があった。情報が付加される場合には①後続する括弧の中で他の言い方が提示される、②アスタリスクで示され社会言語学的情報が付加される、③枠の中で取り上げられる、④ケベック・カナダ文化の紹介 (Faits d'ici) の中で取り上げられる、⑤文化比較 (Ailleurs autrement) の中で取り上げられる、⑥練習問題の中で扱われる、といった6つのパターンが見られた。

語彙に何らかの情報が付加される割合は、標準的な語彙では約34%、口語的な語彙では約92%、アングリシズムの場合は約71%であった。標準的な語彙において情報が付加されるケースの多くは、その語彙の意味に対応するフランスのフランス語の語彙である。例えば、「*chaudron*」(「鍋」)という語彙の直後に「*casserole*」という語彙が括弧の中で示されており、これは「*chaudron*」に対応するフランスのフランス語の語彙が「*casserole*」であることを意味している。口語的な語彙では、アスタリスクが付加された上で社会言語学的な観点からの説明が加えられているケースが最も多く見られた。例えば、アスタリスクが付いた「*mémérer*」、「*jaser*」、「*papoter*」が他の語彙と並べられ、「『重要ではないことについて話す』という意味を持つ語彙に印を付けなさい」という内容の練習問題で扱われており、インフォーマルな状

況の話し言葉で使用される口語的な表現であると説明書きがあった。アングリシズムについては、例えば「chum」、「condo」、「party」などには情報が付加されない一方で、「bienvenue」にはアスタリスクがつき、「批判されるアングリシズムであるが、話し言葉において「どういたしまして (de rien)」という意味で用いられる」という説明書きが見られた。

本研究の分析から、ケベック州で最近出版された教科書においては、ケベック・フランス語の多様な語彙が使用されること、また標準的な語彙の使用の方が多いものの、非標準的な語彙も少なからず使用されることが明らかになった。特に非標準的な語彙の大半は、社会言語学的な情報や、括弧の中に対応する標準的な語彙が示されるといった情報付加が観察された。

文献

AUGER, Julie (2002) « French immersion in Montreal : Pedagogical norm and functional competence », dans Susan GASS, Kathleen BARDOVI-HARLIG, Sally SIELOFF MAGNAN et Joel WALZ (dir) *Pedagogical norms for second and foreign language learning and teaching*, Benjamins, pp. 81-101.

BIGOT, Davy (2021) *Le bon usage québécois : Étude sociolinguistique sur la norme grammaticale du français parlé au Québec*, Presses de l'Université Laval.

CHALIER, Marc (2021) *Les normes de prononciation du français : Une étude perceptive panfrancophone*, De Gruyter.

近藤野里 (2019) 「ケベックのフランス語教科書に反映される語彙的および統語的特徴」『ケベック研究』第11号、66～80頁。

(こんどう のり 青山学院大学)

【シンポジウム】

ケベックにおけるフランス語教育
 ——社会文化的コンテキストのなかで——
 L'enseignement de la langue française au Québec :
 les enjeux dans son contexte socioculturel

移民の社会統合を支えるフランス語教育
 —ケベック州の大学における取り組みについて—
 L'enseignement du français pour soutenir
 l'intégration des immigrants : activités organisées par
 les universités québécoises

松川 雄哉
 MATSUKAWA Yuya

ケベック州政府は、毎年多くの非フランス語話者の移民（以下、移民）を受け入れている。彼らの社会統合には、フランス語の教育が不可欠である。また、彼らがフランス語をうまく習得するには、教室の外でもフランス語を使いながら、ケベック文化に触れる必要がある。しかし、ケベック州に定住して間もない移民は、ケベック人とフランス語で接したり、良い関係を築いたりすることに困難を感じている（St-Laurent et El-Geledi, 2011）。移民が自身のフランス語運用能力に自信を持ってないことが主な理由として挙げられるが、一方でケベック人が移民をよりよく理解する必要性も指摘されている。ケベック州のフランス語教育は、移民が日常生活の中でどのようにケベック人と意味のある交流の機会を得るかという課題に直面している。本発表では、ケベック州の大学で行われている、非フランス語話者の学生のフランス語学習やケベック社会への参加を促進するための取り組みについて扱った。

ラヴァル大学では、*Rêver en français* と呼ばれる、同大学大学院に所属するフランス語を母語としない留学生にフランス語会話のアトリエを提供する取り組みが行われている¹。留学生の中には、英語はできるがフランス語はほとんど話せず社会生活で困難を感じる者もいる。とはいえ大学付属の語学学

校が提供するフランス語プログラムを受講するほどの時間と金銭的な余裕はない。だがケベック人とは学業の面だけでなく、日常的にも交流しながらケベック文化に慣れ親しむことを望んでいる (Madhavi, 2016)。このようなニーズに応えるため、*Rêver en français* は文学部言語学科に所属する教員によって2017年に立ち上げられた。アトリエは、同大学でフランス語やその他の言語の教職課程プログラムに在籍する学部生と言語教育学を専攻する大学院生によって運営されている。学部生は、この運営に携わることによって教職課程修了に必要な単位の一部を取得でき、その一方でここでの活動をテーマに論文を執筆する大学院生もいる。つまり *Rêver en français* には、教員養成とフランス語教育研究のフィールドという側面もある。アトリエの設計には、タスク中心の教授法を採用している。「ケベック市中心街でできる活動を調べて発表する」といったタスクを遂行する中で、参加者はフランス語で協働作業をしながらケベック社会に関わっていく。参加者の証言から、アトリエを通してケベック社会について知ることができ、生活の中でフランス語を使うことに前向きになれたことがうかがえる。

ケベック大学モンリオール校では、*Jumelage interculturel* という、同大学でフランス語を学ぶ学生とケベック人学生の交流が20年ほど前から行われている (Carignan *et al.*, 2015)。この取り組みが始まった背景には、フランス語クラスを担当する教師と教育学部の教師が抱いていた共通の問題意識があった。それは、双方の学生が交流する機会がほとんどないということであった。そのため、フランス語の学生はクラス外でフランス語を実践する機会がほとんどなく、ケベック人学生は移民に関する問題意識が低かった。特に教育学部の学生は、将来学校の先生になったとき、移民の生徒やその親たちと向き合わなければならない。そのほかの分野でも、将来移民の問題に関わる学生はたくさんいる。そこで、2001年に初めて *Jumelage interculturel* の活動がフランス語の学生とソーシャルワークを専攻する学生との間で実現し、その後も心理学や教育学、社会学といった様々な分野のケベック人学生がこの活動に参加した。

この活動において、双方の教師はフランス語の学生とケベック人学生をつなぐ仲介役となる。学期が始まる前に入念に打ち合わせを重ね、活動の目標と内容、さらにフランス語と学生とケベック人学生のペアを決める。全部で4回の交流があり、1回目は顔合わせとして授業中に行われる。2回目以降は授業外で行われるため、ペアになった学生間で連絡先を交換し、出会う場

所と時間は自分たちで決める。双方の学生は、ペアの協力を得ないとクリアできないタスクが予め与えられている。例えばある年の活動では、フランス語の学生は、作文の宿題をペアに添削してもらわなければならなかった。一方ケベック人学生は、毎回の交流でペアと話したこと（ペアの母語や出身国の文化、移民の経緯等）を報告書にまとめるというタスクがあった。この活動を通して、フランス語の学生は、ケベック社会をより理解することができ、ケベック人とのコミュニケーションを恐れなくなることが報告されている。一方でケベック人学生は、移民や多民族社会の実情に関する意識を高めると同時に、自分自身の文化を見つめ直すきっかけとなる。

ケベック人学生と移民の学生が共存するケベック州の大学では、教師のような仲介役によって両者の活発な交流が可能となる。紹介した2つの取り組みでは、移民がケベック社会につながるようなタスクが、フランス語でコミュニケーションを取ろうとする意志を高め、移民とケベック人の相互理解を促進することに貢献している。

（まつかわ ゆうや 早稲田大学）

注

- 1 Réver en français のウェブサイトは以下のとおりである。
<https://www.flsh.ulaval.ca/langues-linguistique-traduction/etudiants-actuels/ateliers-rever-en-francais>

参考文献

- CARIGNAN, Nicole, Myra DERAÏCHE et Marie-Cécile GUILLOT (2015) *Jumelages interculturels : communication, inclusion et intégration*, Presse de l'Université du Québec.
- MADHAVI, Zahra (2016) *Analyse des besoins langagiers d'assistants d'enseignement internationaux poursuivant des études supérieures en sciences et en génie et des implications en découlant pour l'évaluation de leurs compétences langagières : une étude de cas*, Thèse de doctorat, Université Laval.
- ST-LAURENT, Nathalie et Shaha EL-GELEDI (2011) *L'intégration linguistique et professionnelle des immigrants non francophones à Montréal, Québec*, Conseil supérieur de la langue française, Gouvernement du Québec.

【シンポジウム】

ケベックにおけるフランス語教育
——社会文化的コンテクストのなかで——
L'enseignement de la langue française au Québec :
les enjeux dans son contexte socioculturel

ケベック州におけるイマージョン教育の現状と課題
Situation actuelle et enjeux de l'enseignement par
immersion au Québec

小松 祐子
KOMATSU Sachiko

1965年秋からモンレアル郊外で開始されたイマージョン教育はケベック州の社会的政治的状況のなかで生まれた教育方法であるが、カナダ全土に広がり、第二言語教育における成功例の一つとして国際的に高い評価を受けている。カナダにおけるイマージョン・プログラムとは、原則として、英語学校で英語母語者（アングロフォン）の生徒に対し、数学、科学、歴史、地理などの授業をフランス語で提供する「フレンチ・イマージョン」である。生徒らが大量のインプットにより自然にフランス語を習得し、英語とフランス語の公用語バイリンガルになることが目標とされる。このようなバイリンガル育成には、国家の制度的基盤である二言語主義を保障し、公用語グループ間の相互理解を促進し、ひいてはカナダ国内の公用語マイノリティであるフランコフォンを価値づけるという、言語政策上および社会統合上の重要な意義が認められる。

イマージョン教育においては、クラッシュのインプット仮説に基づき、教科内容の「理解可能でかつ意味のあるインプット」を与えることで、言語自体を教えることなくその習得を促す。また、カミンズの言語相互依存説により、イマージョンにより習得した能力は他の言語による認知能力に転移すると考えられている。加算的バイリンガリズムが目指され、フランス語イマージョンが英語能力に悪影響を及ぼさないことが多数の研究により証明されて

いる。しかし他方で、イマージョンで習得される受容能力（聞く、読む）はフランス語母語者と同等に達するが、産出能力（話す、書く）では母語者にはるかに及ばないことや、文法上の誤り、語彙の乏しさ、発音の不正確さなどの問題が指摘されている。教科内容の学習が重視され、言語形式の学習が不足するため、意味と形式のバランスが求められてもいる。さらに、早期イマージョンに比べて中期以降のイマージョン参加者数が明らかに少なく、中等教育と大学教育との接続が保障されていないといった継続の問題や、プログラムへのアクセスや教員不足の問題も深刻である。

ケベック州外カナダでのフランス語イマージョン・プログラム登録者数は1970年代後半からの20年間で約10倍に増加し、2019年には487,000人に達している。FLS（第二言語としてのフランス語）プログラムのなかでのイマージョン・プログラム履修率は、2011年から2016年に9.9%から11.3%へと増加した。他方、ケベック州においては、FLS履修者のうちイマージョン・プログラムで学ぶ生徒の割合は2011年から2016年にかけて36.2%から32%へと減少している（Canadian Parents for French, 2017）。また、同州アングロフォンのバイリンガル率は2016年の68.8%から2022年には67.1%へ減少した（Statistique Canada, 2022）。

ケベック州でイマージョン教育を受ける生徒は、アングロフォンとアロフォン（第三言語母語者）であるが、今や英語教育委員会の生徒（約10万人）の半数がアロフォン（移民出身者または一時滞在外国人）であり、英語を母語としない、多様な文化的背景を持つ生徒たちであることに留意が必要である。アングロフォンの保護者の多くは、イマージョン・プログラムが、英語系言語文化を守りながら、フランス語の習得とケベックの文化・社会への統合を可能とし、子どもの社会的幸福につながると考え、このプログラムに好意的イメージをもってきた（De Bretagne, 2013）。しかし、近年アングロフォンの英語学校離れが加速しており、フランス語習得を目指すアングロフォン生徒の多くがフランス語学校へ通学することが増えていることが、イマージョン履修率低下の原因の一つと考えられる。ケベック州でフランス語学校に通うアングロフォン生徒の数は2015年には1976年の3.4倍まで増加し、2015年には英語学校に通う資格を持つ全生徒の11.3%がフランス語学校に通っている（OQLF, 2017）。

ケベック州におけるフランス語化政策の強化を目指す96号法採択（「ケベック州の公用語・共通語であるフランス語に関する法律」2022年6月1日発効）

はケベック社会に緊張をもたらしたが、教育現場においては英語系 Cégep 学生らが激しく反発していることが伝えられている。96号法により英語系の Cégep においてフランス語で3科目を履修することが義務化されたが、このことが小中学校のイマージョン・プログラムへ今後どのような影響をもたらすかが注目される。政府の期待どおりフランス語強化へと働きイマージョン履修者が増えるというシナリオと、逆にアロフォンの学生たちがケベック州を去るというシナリオが想定される。英語教育委員会は後者を危惧しており、メディア・インタビューに答えるアロフォン学生の証言からもその可能性が疑われる。ケベック社会においてアングロフォンのバイリンガル化と統合という使命を果たしてきたイマージョン・プログラムは、今日、アロフォンのフランス語化という課題に直面していると言えよう。

(こまつ さちこ お茶の水女子大学)

参考文献

- CANADIEN PARENTS FOR FRENCH (2017) *L'état de l'enseignement du français langue seconde au Canada en 2017 : les élèves des programmes de français langue seconde*, Canadian Parents for French.
- DE BRETAGNE, Gonzague (2013) *L'immersion française à Montréal. Quelles politiques linguistiques chez les parents d'élèves anglophones ?*, Mémoire de Master professionnel, Didactique du français langue seconde/de scolarisation, Université du Maine.
- OFFICE QUÉBÉCOIS DE LA LANGUE FRANÇAISE (2017) *Langue et éducation au Québec, 1. Éducation préscolaire et enseignement primaire et secondaire*, OQLF.
- STATISTIQUE CANADA (2022) « Alors que le français et l'anglais demeurent les principales langues parlées au Canada, la diversité linguistique continue de s'accroître au pays », *Le Quotidien*, le mercredi 17 août 2022. <https://www150.statcan.gc.ca/n1/fr/daily-quotidien/220817/dq220817a-fra.pdf?st=KAnzvBEp> (2023年5月7日最終閲覧)